笑門来福

加戸病院内子町移転新築竣工記念「狂言」公演

狂言のこころ

平成二十三年
十一月五日（土）

開場　午後二時三〇分
開演　午後三時三〇分
終演　午後五時三〇分

日本の和らい
語り手　茂山千三郎

狂言

水掛聟（みずかけむこ）
舅●茂山千五郎
聟●茂山宗彦
女房●鈴木　実

千鳥（ちどり）
太郎冠者●茂山あきら
主人●島田洋海
酒屋の亭主●丸石やすし

神鳴（かみなり）
神鳴●茂山千三郎
医師●松本　薫

料金：1,000円（全席自由）　発売日：9月1日（木）より

入場料は、東日本大震災の義援金として、日本赤十字社を通じて全額寄付いたします。

会場：内子座（愛媛県喜多郡内子町）　主催：医療法人弘友会 加戸病院　後援：内子町

◆チケット販売・お問い合わせ（平日午前8時30分～午後5時）

医療法人弘友会　加戸病院　総務課／〒791-0052 大洲市若宮548番地　TEL.0893-24-5102
内子町役場　町並・地域振興課／〒791-3392 喜多郡内子町内子1515番地　TEL.0893-44-2118

【加戸病院一般内覧会】　喜多郡内子町内子771番地　11月6日（日）午後1時30分～4時30分（餅まき：午後2時30分）

水掛聟（みずかけむこ）

聟が田の見回りにくると、水が隣の舅の田に取られているのに気付きます。そこで、畦（あぜ）をきって水を自分の田に引き、よそを見回りにいきます。つぎに、同じように見回りにきた舅は自分の田に水がないのに気付き、聟の田から水を引き返すと、水を取られないよう番しているところ、再び見回りに戻ってきた聟があらわれて水を引こうとし、舅と口論になります。互いに畦を切って水を引こうと争ううちに、聟が舅の顔に泥水をかけてしまいます。二人は水をかけあったり、泥を顔になすりあったりし、しまいにはとっ組みあいになります。その話しを聞いた妻が駆けつけ仲裁に入るのですが・・・。

青々と広がる田んぼの畦で、鋤や鍬をふりあげて水争いをする舅と聟。まるで幼児の喧嘩のようなおかしさと、舅・聟・妻の人間模様。稲と土の匂いのする懐かしい夏を思い出し、お楽しみいただきたく存じます。

千鳥（ちどり）

付けで酒を買ってくるように主人に命じられた太郎冠者が、支払がたまっているため酒屋は酒を売ってくれません。

太郎冠者は亭主を巻き込み津島祭の様子を囃しながら調子よくはなします。その隙に樽に近づき持ち去ろうとしますが、亭主にみとがめられます。今度は山鉾を引く様や、流鏑馬などを話し、最後には馬に乗る真似をしながら走り回り隙を見て酒樽を持ち帰ります。何とか酒を手に入れようと、祭りの様子を身振りをまじえて演じる太郎冠者の奮闘ぶりが見どころです。

神鳴（かみなり）

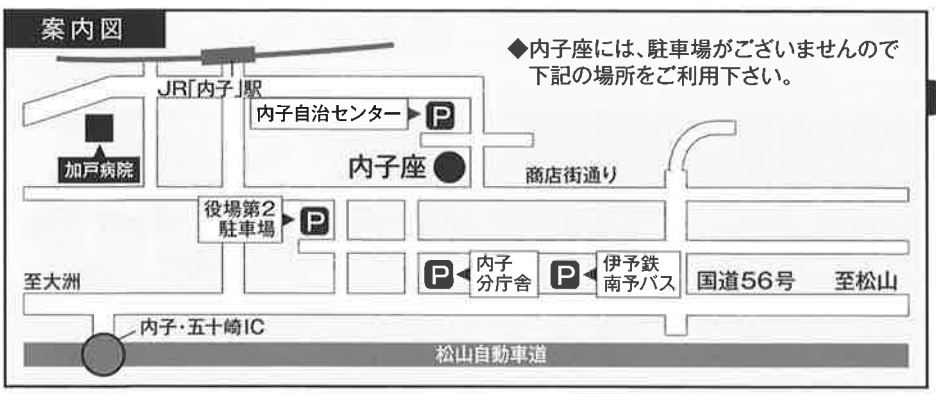
都で流行らぬヤブ医者が、東国へ下ろうとします。その途中、突然雷鳴が響き渡り、目の前に神鳴り自身が落ちてきました。

腰を強く打った神鳴は、この医者に針治療をしてもらい、そしてまた雷鳴を響かせながら天へ帰っていくのでした。

地震・神鳴・火事、親爺。怖いはずの代名詞が舞台の上では、針に脅え、愛らしく見える、古典SF狂言です。

この劇場は、木蝋や生糸等の生産で経済的にゆとりのある時代に、芸術、芸能を愛してやまない人々の熱意で生まれた木造の劇場です。あるときは、歌舞伎、人形芝居、あるときは落語、映画等、農閑期には、もてはやされ出し物が内子座を彩り、人々の心の糧として大切にされました。名前を「内子座」といいます。

内子座は、大正5年2月（1916）大正天皇即位を祝い、創建。木造2階建て瓦葺き入母屋造り。ホールとして活用後、老朽化のために取り壊されるところ、町民の熱意で復元。昭和60年10月、劇場として再出発。現在では年間5万余人が見学し、1万余人が劇場活用。約650人で劇場は一杯となります。



交通のご案内

- 松山自動車道松山ICから内子・五十崎IC経由で約30分
- JR松山駅からJR内子駅まで特急で約30分
- JR内子駅から徒歩で約15分